

J. F. ヘルバルトにおける視点の形成

上 蘭 恒 太 郎

Die Formierung seines Standpunkts bei J. F. Herbart

Kohtaro KAMIZONO

- I. 教育学を一個の全体学として体系化しようとする気運が高まっていた
- II. フィヒテとヘルバルト
- III. 宿命論か自由論か——『全知識学の基礎』
- IV. 哲学は恣意によって決定されるべきではない——批判的観念論
- V. ヘルバルトにおけるカント的背景
- VI. 宿命論並びに先験的自由論か、陶冶可能性論か——ヘルバルトのフィヒテ批判
- VII. 陶冶可能性論の視点

I. 教育学を一個の全体学として体系化しようとする気運が高まっていた

哲学者 I. カントは、1776年以来ケーニヒスベルク大学で教育学を講義した。教育学は、当時、授業科目として各大学に設けられ、一般に哲学の教授が担当していた。カントの記憶にもペスタロッチやバセドウ等の名前が重要な教育家として留められている。1779年になって教育学の正教授が誕生した。ハレ大学における E. Chr. トラップである。1780年に彼は、哲学及び教育学の教授またハレ大学の教育学研究所の長という肩書きで『教育学研究 (Versuch einer Pädagogik)』を出版した。これは教育論を体系化し学問として成立させようとする意図をもった最初の本だと言えよう。教育学の教授を名乗るためには、教育学が一個の独立した学問であることを主張しなければならなかった。トラップが教授就任と共にこの本を出版したのはそのためだと考えられる。それまでに確かに意図的な教育実践が数多く積み重ねられていた。しかし、Th. フリッチェが1913年にこの本を再び世に送り出す時「1780年までの汎愛派の目標と営為の体系的叙述」という副題をつけていたことでも知られるように、教育における諸経験の体系的集積以上のことを論じたものではなかった。つまり、教育学がいかにして一個の全体学として成立しうるかについて、即ち教育学の学問理論について検討したものではなかった。このためには、経験の蓄積だけではなく、学問理論 (Wissenschaftstheorie) そのものの刺激が必要であった。

18世紀の終りにカント哲学が流布するに従い、これが刺激になり、教育学を学問として

構築しようとする種々な試みが生まれる。カントの批判哲学やフィヒテの学問理論等の新しい流れは、教育学にも影響を及ぼさずにはいなかった。J. Chr. グライリングは1793年に、『教育の最終目的について、また教育の学問の第一根本命題について (Über den Endzweck der Erziehung, und über den ersten Grundsatz einer Wissenschaft derselben)』において、教育学の学問としての体系化を目指したという¹⁾。また1795年にはF. I. ニートハンマーによって『ドイツ学者協会哲学雑誌 (Philosophisches Journal einer Gesellschaft Deutscher Gelehrten)』が発行される。この雑誌の発刊に際して、学問としての哲学の構築が意図されていた²⁾と同様、学問としての教育学がいかにして可能かも問題とされる。同誌第一巻第二号の書評において「教育学が学問として可能であるのか否か、またいかにして可能であるのか、の問いは、未だに一度も決定的に提出されたことはなかった。だからこそまた教育学の学問に向けての第一歩が一層重要なのだ」と述べられている³⁾。このように、教育学についての学問理論が意識され、カントやフィヒテの考え方を土台に、種々な見解が述べられていく。

こうした教育学の状況を、C. メンツェ⁴⁾、F. ニコリン⁵⁾の述べるところを中心にして次のようにまとめることができよう。グライリング、ホイジンガといった教育学上のカント主義者達は、それまで注意、経験、規則の集合体であった教育論を、カント的な学問観を基礎にすることによって、学問としての内的連関をもつものへと高めようとしていた。教育学も、例外なき統一性、組織だてられた体系、普遍妥当的な原理といった基準に合う学問とならなければならない。この線に沿ってグライリングがヘルバルト以前に既に、教育学を道徳哲学と心理学の娘と呼び、最終目的は前者によって、最上の手段は後者によって得ようとの構想をうちだしていることは注目に価する。更に、リッター等の教育学上のフィヒテ主義者達は、教育学を基礎づけるために、どこででもかつあらゆる条件の許で妥当する根本命題を得ようとしていた。これはフィヒテの『全知識学の基礎 (Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre)』に倣ったものである。リッターは、先述した『哲学雑誌』に、『普遍妥当的教育学の必然性の証明のための教育学批判 (Kritik der Pädagogik zum Beweis der Nothwendigkeit einer allgemein Erziehungswissenschaft)』と題する論文を載せている⁶⁾。

このように、教育学を学問としてうちたてようとする気運は高まっていた。更に、グライリングの本の出版年、先の『哲学雑誌』がイエナで発行されフィヒテも後に編者となったこと、を考えればヘルバルトもこれらの論文を読んでいたと考えるのが妥当である。

Ⅱ. フィヒテとヘルバルト

こうした教育学の状況を念頭におきながら、フィヒテとヘルバルトに関する事実経過を振り返ってみよう。

二人は同じ年にイエナ大学に着任、入学し、ヘルバルトはフィヒテの弟子として大学時代を送った。フィヒテは1794年5月にイエナ大学に助教授として赴任した。着任後早速おこなった講義の一つ⁷⁾が、いわゆる「全知識学の基礎」について⁸⁾である。この講義でフィヒテは学問論 (Wissenschaftslehre - フィヒテの著作の訳語としては、知識学) を、即ち今日我が学問理論 (Wissenschaftstheorie) と呼ぶ、一個の学問の成立根拠についての思索を展開していく。

ヘルバルトも1794年にイエナ大学に入学し先の講義を聴講した。そしてこれについて短い「覚え書」を書いた。そこには、自我論における同一律について等いくつかの質問や疑問が書きつらねられている。ハルテンシュタインによれば、ヘルバルトはこれをフィヒテに個人的に見てもらい、これに対するフィヒテの判断を口答で受け入れた、という⁹⁾。この「覚え書」に書かれた疑問点には後のフィヒテ批判につながる要素も含まれている、と読みとることもできる。しかし、この時点でそこまで深読みする必要はあるまい。要は、ヘルバルトが大いに関心を持ってこの講義を聴き、当時のフィヒテの思想にとりつかれていった、ということである。

ヘルバルトはその後もフィヒテと親しくしていたし、フィヒテの許に集まった人々、“Freien Männer”の仲間であった¹⁰⁾し、フィヒテの知識学の批判から出発して自己の思想を形成していった等の事情を考える時¹¹⁾、次の二つの手順によってヘルバルトの視点が見えてくると思われる。

1. フィヒテのいわゆる『全知識学の基礎』に踏み込み、更にそれを当時の思想的状況の中に置くことによって、ヘルバルトが受け取っていった思想の枠組みを明らかにする。
 2. その上で、フィヒテに対するヘルバルトの批判をとりあげ、ヘルバルトの独自の視点を見明らかにする。
- 従って次に、フィヒテの『全知識学の基礎』¹²⁾を取り上げる。

Ⅲ．宿命論か自由論か——『全知識学の基礎』

必然か自由かはこの時代の関心事であった。この問題はカントに於てもフィヒテに於てもヘルバルトに於ても形を変えながら論じ続けられる。自然や人間における必然の連鎖をどう位置づけ、人間の自由をどのように保証するのか、を離れて彼らの思想を論じることにはできない。それは、カントの三批判を各々対比的に考える場合にそうであるだけではない。『純粋理性批判』の内でも、自然の因果性について論じながら、人間の自由に依る自由な行為を端的な始まりとして一つの因果系列が始まる（自由の因果性）と語る時にそうであり、『実践理性批判』において、自由を存在根拠（ratio essendi）として人間がすべからく従うべき道徳法則について論ずる時にそうである。フィヒテにしても必然による決定論に組するか、実践的自由を保証する自由論を採るか、が彼を悩ませていた問題であった。フィヒテは初めどちらかと言えば決定論に組していた。しかしこの時、生活を支えようと学生に教えるために読み始めたカントによって彼の自由論への方向が決定的なものとなった、との話は有名なところであろう。

フィヒテは言う、「私の体系はカントのとは違ったものではない」¹³⁾。カントは三批判を提出したがしかし、それらを統合した体系を建設しはしなかった。もしこの体系が叙述されていれば、「知識学の著者はその労力を免れたであろう」。こうして、一切の可能な学問についての体系的統一の基礎を明らかにするという課題がフィヒテに残されることになる。そこで彼は、『全知識学の基礎』に関する講義、著作活動を精力的に進める。『知識学への第一序論（Versuch einer neuen Darstellung der Wissenschaftslehre）』¹⁴⁾は、フィヒテの次のような自負から書き始められる。「カントの数多くの後継者の誰一人として、（カントにおいて）本来何が説かれているのかに気が付いていない。著者（フィヒテ）

はこれを知っていると確信する。(従って)彼(フィヒテ)は彼の生涯をカントから全く独立して叙述することに献げようと決心した」¹⁵⁾と。こうして叙述される『全知識学の基礎』は、我々の自由の感情に伴われている或る表象と、他の必然の感情に伴われている表象とにかかわる課題を特に本来的に解かなければならない学問¹⁶⁾、であった。

カントの体系の、ひいてはあらゆる学問の統一的な根拠づけのために「我々はあらゆる人間の知識の絶対的に第一なる、端的に無制約的な根本命題を探究しなければならない」¹⁷⁾とフィヒテは『聴講者に対する草稿としての全知識学の基礎』で述べる。そのために彼は、誰も抗議することなく認める得る命題から出発しようとする。この命題として〈AはAである〉が選取られる。この命題を確定ならしめるために彼は、Aの实在、非实在の問題を切り離す。「(Aは判断する自我に対して端的に在る)」¹⁸⁾そのことによって逆にAを定立せしめる主体の働きを浮び上らせる。「(Aは)而して唯々自我一般の内にそれが定立されてあるということに依ってのみ在るのである」¹⁹⁾。即ち、最初の命題は、もしAが定立されているならば、という制約の許に成立している。しかるに、我は我である、という命題は無制約的にかつ端的に妥当する。この手続によって浮び上る主体の働きを把えてフィヒテは、我は在る、という命題が意識の事実に於て端的に妥当する、と主張する。フィヒテによれば「自我の定立は自我の純粹能動性である」、「自ら自己を定立することと存在することとは(Aの存在、非存在とは異なり)、自我に関して用ひられては全然同じことである」²⁰⁾。なぜなら、自我は働くものであると同時に活動の所産である。能動的なるものであると同時に能動性によって産み出されるものであるからだ。そこから知識学の劈頭に置く、いわゆる第一根本命題は次のように表現される。

＜自我は根源的に端的に自己自身の存在を定立する＞

フィヒテは更に第二根本命題を次のように定式化する。

＜自我に対して端的に非我が反定立される＞

第三根本命題は次の通りである。

＜自我は自我の内に於て可分的自我に対して可分的非我を反定立する＞

ここで木村素衛のフィヒテ解釈を援用したい。彼によれば、フィヒテが展開したのは「自覚的存在者の一つ存在論」²¹⁾である、フィヒテ的自我の本質は「実践的ということに尽きる」²²⁾。フィヒテ自身も「一切が自我と一致すべきであり、一切の实在が自我に依て、端的に定立されてあるべきであるといふ夫の要求、これは人が実践理性と呼ぶものの要求である」²³⁾と語る。この実践性は「カントに於けるそれとは異って、非我をその本質的契機の一つとして有っているもの」²⁴⁾である。カントの場合「第二批判の中心問題は実践理性の自己立法性の解明にあったといふことができる。実践的自由とは、この自立性に他ならなかったのである。ところがこの実践理性が如何に自然と連関し、如何に自然をみづからの存在の本質的な一つの契機とするかに就ての総合的体系的構造連関に関しては、第二批判は何事も積極的には示していない」²⁵⁾。フィヒテの第三根本命題は「自我の自己否定を媒介とする自己肯定に於て成立していた。そしてその際その自己否定面が非我としての物的自然に他ならなかった」、「フィヒテ的自我はそれ故物的自然を自覚の媒介契機とする自覚者であるといふことができる」、「物的自然を媒介契機とする自覚は(自己)形成的な表現に於ける実践的行為に他ならない」²⁶⁾。実践的自我はこうして「本来絶対的实在性を要求する自我が非我に遭遇する一点を媒介として、……この遭遇点を乗り越え

つつ現実的認識を媒介として自己限定的に理想を自覚しこれに依て非我を形式的に限定してゆく方向に」²⁷⁾ 成立している。

この解釈に依ってフィヒテの『全知識学の基礎』を読んだ上でヘルバルトの批判如何を考えてみると、ヘルバルトのフィヒテ批判を先取りすることになるが、基本的に二つの点について批判していることになる。

- i) 教育の場面にあっては、基本的に二つの人格があい対しているのであり、一つの自我が遭遇する非我は決して物的自然に解消されるものではない。非我が物的自然であるとき、非我として措定されたもう一つの人格は、自我の自己還帰運動の単なる契機に堕してしまふ。たとえ非我を形式的に限定するという、単なる契機としての遭遇点から先への乗り越えがフィヒテに認められるとしても、もう一つの人格は単に自我によって形式的に限定される対象に止まるものではない。自我の単なる契機、自我によって単に限定される対象として非我が把握られ、物的自然を主眼とした非我である以上、フィヒテの論によって教育は把握されるべきではない。
- ii) 自我が要求すると同じ絶対的实在性を非我においても認め得るとの保証をフィヒテの論に見出すことはできない。自我非我の関係を、非我の側からの即ちもう一方の自我の側からの自我—非我関係として把握得る、と考えてみても、二つの自我のとり結ぶ関係が双方にとって同一のものとして成立しているとの確証はない。つまり二つの絶対的存在（自我）の間に一つの調和が存する保証はない。

ヘルバルトの批判は、ここから更に「観念論」に対する排斥にまで及ぶ。この点は後に論じる。ここでは、フィヒテを継承している点について述べておく。それは、ヘルバルトが自分の倫理学を「実践哲学」と名付けた点に端的に現われており、また、一定の根本命題を出発点として教育学の学問としての体系を構築しようとしたやり方に現われている。後者は『教育学講義綱要』の叙述の形式にはっきりと現われているだけではなく、『教育の主要任務としての世界の美的呈示について』の構成に既に示されている²⁸⁾。更に、実際の教育のあり方を論述する狭義の教育学に関する著作を含め、実践哲学、心理学、等を踏まえた広義の教育学の中心的論点（それはヘルバルトの思索の中心を占めるものでもあるが）において、第三の継承点が現われている。

- i) 教育が他の人格に対する実践的な働きかけを任務としている以上、教育学のための自我論においても、実践的性格は保たれていなければならない。この点では、フィヒテの自我論は正当な方向を指示している。行為主体の実践的性格は、教育学においては、関係し合ったもう一方の存在を实在として保証する、という形で考え直され保持されなければならない。
- ii) 端的に無制約的である根本命題から出発して、教育学の全体の体系的統一をはかろうとする学問理論の基本的な形は、ヘルバルトにおいても不変のものであった。ヘルバルトがフィヒテのとは違った新たな知識学（学問理論）を展開しようとしたと言っても、彼にとって教育学の学問としての形は、一定の根本命題に基づく、一まとまりの自己完結的な体系、であった。
- iii) 教育学の根本命題は、フィヒテと同様、自我論に於て求められる。つまりフィヒテがあらゆる学問の基礎としての知識学を自我論の考察として展開したことに、ヘルバルトは特に疑問を抱かなかつた。教育学の学問理論的考察も、主体の実践的性格の問題

も、自我論を場として展開される。しかも、そこでの問題の主軸は、必然をいかに位置づけ、自由を保証するか²⁹⁾、であった。

今一言付け加えるならば、ヘルバルトもまた自分をカント及びフィヒテを正當に引き継ぎ、その上で自己の新たな主張を打ち出したのだ、と認識していた。彼の認識の全面的正當性についてはともかくとしても、確かにヘルバルトは、フィヒテ的に理解されたカント及び『全知識学の基礎』におけるフィヒテを継承している。

ここで、今一度『聴講者に対する草稿としての全知識学の基礎』に戻って、ヘルバルトの、フィヒテを主眼とした「観念論」批判に、自我論を扱う形で、触れておきたい。

第一根本命題を掲げた後、フィヒテはデカルトに遡って自我論を論ずる。フィヒテは言う、デカルトもまた根本命題に似たものを挙げた、*cogito, ergo sum* がそれである。フィヒテによればこれは「我は思惟する者である、故に我在り (*cogitans sum, ergo sum*)」と言うのと同じである。しかし人は思惟する以上必ず存在し、思惟は存在の一つの特殊な限定にすぎないから、*cogitans* という付加語は冗漫である。従ってフィヒテは自分ならばこれを「我在り、故に我在り (*sum, ergo sum*)」³⁰⁾ と言うであろう、と述べる。ここに至ってヘルバルトはこれを「観念論者の思弁的トートロジー」だと非難する。ヘルバルトはここで、フィヒテが馬脚をあらわしていると、非我がもう一つの絶対的人格などではあり得なかった、結局自我の自己運動にすぎぬ、と批判してもよかっただろう。*sum, ergo sum* という形式的トートロジーに明かなように、フィヒテの自我は自己自身による自己の指定から成り立っている。そこでは自我が自己意識を映し見ているだけである。フィヒテの非我は他者の人格であるはずもなく、汝 (*Du*) も我々 (*Wir*) も登場し得ない³¹⁾。かくしてヘルバルトは、フィヒテを超えなければ教育という具体的に人格のあい対する場に根ざした教育学を構成することはできない、と考えるに至る。

Ⅳ. 哲学は恣意によって決定されるべきではない——批判的観念論³²⁾

フィヒテはデカルトに続いて、ラインホルトを引合いに出す。「ラインホルトは表象の命題を設定する、デカルト的な形式を取れば彼れの根本命題はこうであろう、我れ表象す、故に我れ在り (*repraesento, ergo sum*)、或は更に正しく言えば、我は表象する者にてあり、故に我れ在り (*representans sum, ergo sum*)」³³⁾ フィヒテはラインホルトに対しても同じ論を向ける。「これでは未だ十分ではない。何となれば表象することも亦存在の本質ではなく、その一つの特殊な限定であるから。」³⁴⁾ そうすると結局のところは、*sum, ergo sum* と、デカルトの場合と同様に言うしかなくなる。

cogito (あるいは *repraesento*) の明証性から出発して自己存在に至るという証明のやり方を採らずに、*sum, ergo sum* という少なくとも形式上トートロジーである命題によって、諸学問は根拠づけられると言えるのか、と私は思わざるを得ない。その時フィヒテは哲学の根拠について次の様に答えるのであろう。一即ち、哲学には結局、独断論(的実在論)と観念論との二つしかあり得ない、この二つは各々理性によって根拠づけられることはない、あえて答えようとすれば恣意に従って、と言う他ない、と。「如何なる哲学を人が選ぶかは、従って、彼がいかなる類の人間であるかにかかわる。」我々のもつ表象の根拠は何であるかと問われるとき、その根拠は自我の自立性(自我自体)か物の自立性(物自体)に求める他はない。そこに観念論と独断論の相異がある。それらのいずれが第一の

根拠とされるべきであるかを、理性によって決定することは不可能である。どちらかによって哲学の全系列を始めることが問題なのであり、このことは「唯々思惟の自由に依存するからである」。「決定根拠は恣意に依って」「傾向性と関心に依って規定される」。「観念論者と独断論者との相異の最終根拠は、従って彼等の関心の相異である」。しかし、「最高の関心、他の一切の関心の根拠は我々自身に対する関心である」。それ故、自我の自由と自立性の要請によって、観念論を選ぶのだ³⁵⁾—と。

フィヒテにとってカントは、自由に基づく哲学であったことによって、「自我に対する関心」から構成された哲学である点で評価される。だが物自体を、否定し去らぬという仕方に残しておいたカント、またそのようなカント解釈、は受け入れられない。表象の背後に物自体の可能性を否定しきれないことは、触発されるという仕方では生ずる直観から出発して考えを進めるからである。カントは自己意識と（直観的）所与との間の二元的ディレンマから免がれていない。ここにはなお独断論的实在論の可能性が残されてしまった。カントの意図を徹底しようとすれば、物自体の存立の可能性を離れて、先験的統覚にすぎなかった自己意識を、それ自体であらゆる経験の根拠となり得る自我へと、つまり非我をも産出しうる自我へともたす必要があった。即ち、先験的な性格を強調された観念論が、フィヒテの観念論であった。

経験的と先験的との区別を自ら強調しながらなおフィヒテの「観念論」を批判するとき、ヘルバルトは、どこに自らの立場を求めようとするのか。もう一つのカント解釈に立ち帰ることになるのだろうか。ここでヘルバルトが当時眼前にしていたはずの、批判的観念論の立場、この立場からのフィヒテ批判について考えてみたい。

フィヒテは卒直であるとは言えるにせよ、恣意の決定に哲学の根拠を委ねることに異論のなかろうはずはない。そもそも、フィヒテの暴言とも言われかねない論が出現したのは、カントが慎重に設定した限界を超えて、物自体や自我自体について語ろうとしたからである。「自我自体こそは観念論の客観である」³⁶⁾とフィヒテが言うとき、彼はカントの理性批判の許容範囲を超えている。—こう考えてカントの批判哲学としての枠を守ろうとした立場を、批判の意味を強調した立場として批判的観念論と呼んでおこう。この立場にある哲学者として、ラインホルト等を考えることができよう。批判的観念論の立場からすれば次のように主張できる。即ち、哲学者はともすればあらゆる学問の唯一の根拠を探し求めてそれを物自体や自我自体だと言いたがるが、それは所詮フィヒテも認めざるを得ないように哲学者の恣意である。恣意は哲学の原理としては排除されなければならない。これに代わって、理性によって正当と判断されるもののみで哲学は構成されるべきである。その意味でもカントの、自己意識と（直観的）所与との二元的ディレンマの中で理性の批判を遂行してゆくやり方こそ哲学本来のあり方である。物自体ではなく、対象のあらわれとしての表象を認め、自我自体ではなく、理性によって真とされる規則（範疇、数学、論理学等）を認め、そこに哲学を成立させるべきである。

ヘルバルトの、表象一元論や、数学的合理性を重んじる態度は、批判的観念論の立場に近いもののようにも思われる。フィヒテの「観念論」を、自我の閉塞的な自己循環だと批判して、対象のあらわれとしての表象によって自己の論を組み立てようとするとき、また、数学の合理性によって表象の浮沈を説明しようとするとき、ヘルバルトは批判的観念論への途を歩むようにも思われる。

しかし他方、ヘルバルトが、フィヒテの非我には人格の實在性を認めることができないと非難する時、批判的観念論の立場からは、物自体を認めようとしていると反論されかねない。ヘルバルトが『一般実践哲学』において、五つの理念を導き出すために持ち出した、誰もが認めるはずの最も単純で根源的な意志の関係は、基本的に、＜自我—表象—（実在する）他者＞の図式によって成立している³⁷⁾。そして、表象された他者と実在する他者に対して下される美的判断は異なっている。このことは、表象とはまた別に、ヘルバルトが実在を措定しているということである。その意味では、彼も批判哲学の枠の中に止まらず、むしろ物自体（ヘルバルトの場合、物ではなく人格の實在だとしても）を持ち出すことになっている。ここではヘルバルトは、批判的観念論者であるよりもむしろフィヒテの弟子である。物自体の位置に人格の實在を置こうとして、彼がフィヒテの「観念論」を批判する時、批判は基本的に、批判的観念論に対してもあてはまることになる。従って、フィヒテの立場を批判するに同様な点があるとしても、ヘルバルトは批判的観念論とは違った独自の立場を目指していたと考えるべきである。

更に、ヘルバルトにとってのカントについて、当時の思想的状況を整理してみたい。というのも、他者の人格の實在がヘルバルトにおいて、あっさりと素朴なままに認められている如く私には思われるからである。教育学にとって、他者の人格の實在を認めるという論点は重要である。しかし、カントの批判哲学としての枠組みがあまりにたやすく乗り越えられ、フィヒテにしても、割合安易に非難されているように思われるから。カント及びフィヒテの論に変更を加えることについて予想される苦難もさほどのこともなく、素朴な形のままで＜自我—表象—他者＞の図式が提出されているように見えることについて、一つの弁明が必要だと思われる。ここでは認識批判が十分に検討されないまま存在が顔を出している。

V. ヘルバルトにおけるカント的背景

この論文でカントを扱おうとするとき、次のことが重要だと思われる。G. マルティンの指摘³⁸⁾を逆に援用するならば、フィヒテやヘルバルトにとってカントは、形而上学を意図して存在論的に解釈される対象でもなく、新カント派の如く認識論および科学論の視点から評価される対象でもなかった、当時、カントに続こうとした思想家にとって、カントは積極的克服の対象だったのであり、彼らはカントを超えてカントの意図を実現することに急であった、と言えよう。この点では、先に述べた教育学上のカント主義者達も同様であった。今、存在論的また認識論的なカント解釈を枠外においてカントを見直すとしても、カントが物自体や自我自体について直接に語ることはあり得ない。しかし、フィヒテは結局自我自体について語る。またヘルバルトも表象の背後の實在について語ろうとする。この点で、今私は、彼らのカント解釈について批判的に述べることもできよう。しかしフィヒテにとってそうであったように彼らの体系は「カントのと違ったものではない」のである。感覚知覚の背後に物自体を想定し、自我自体の実体性を想定する考え方の起源を探てみると、カント自身の批判前期の発言にぶつかる。ヘルバルトが受容したカント的思考においては、批判前期のカントであるか否かはさほど考慮されなかったであろう。カントは言う。「われわれが一般にあらゆる実体についてもっている概念は、じつはこのような（内的直観による）自我から借用されたものにほかならない。自我こそが、もろもろの

実体の根源となる概念なのである」。これはカントの思考が、デカルト以来の「我思う」の探究と同様、どんな自我も、外的対象を知覚する場合とは違って、より確実にかつ明証に自己自身で実体を把握することができ、ひるがえってそこから実体としての実在一般へ近づくことができる、との考え方に根ざしていたと言えよう。この、自我にとって明証である自我、の探究から実在一般へ展開していこうとする考え方は、ライプニッツ・ヴォルフ流の思想を学んでいたヘルバルトにあっても、当然に受け継がれている。ヘルバルトがこうした流れの中でカントを知り、また自我論としてカントを統一的に理解しようとしたフィヒテの門下生であったことを思い起せば、彼にとってこれは当然の考え方であったと言えよう。従ってヘルバルトにおいては自我論の探究と外的対象の実在性が容易に結びつき得たのであろう。ヘルバルトは語る、「内的に知覚されたものは、可能なところでは外的なものに移しかえられる」³⁹⁾。

カントにおいて自我は、一切の概念に伴う意識、つまり先験的主観である。この自我の自発性によってカテゴリーと直観の多様とが結びつけられて総合判断を形成し、またア・プリオリな道德法則と実践における自己の意識とが結びつけられて道德性へと至る。これら二つの間の緊張関係を克服すべき対立と見做し、先験的主観の側に集約しようとしたところに、フィヒテ以後の観念論の流れが生まれる。ヘルバルトもまたカントを先験的自由に力点を置いた論として、フィヒテの方向で理解する。そこでヘルバルトのカント批判は、カントの自我が実践的性格をもたない、という点を突く。この点ではフィヒテの自我論から自分の受けとったものがカントにはない、と批判しているようである。ヘルバルトも自発性をもつ自我で満足しなかった。カントの自我は彼には、静的なものに見える。それ故カントの自我は、二つの自我が相互に関わりあう教育の場に十分な動的性格を備えていない、と批判される。教師は「根本的善が……生徒の中に全くひとりでに現われてくるのを静かに待つこと以上に理にかなうことはない」⁴⁰⁾ではないかと。

しかし、そもそものヘルバルトの関心からすれば、ヘルバルトはフィヒテと同じカント批判を展開したのではない。彼の関心からヘルバルトの視点をはっきりさせていきたい。

Ⅵ. 宿命論並びに先験的自由論か、陶冶可能性論か——ヘルバルトのフィヒテ批判

ヘルバルトはそもそも人間に対する関心を強く抱いていた。それは、カントとフィヒテの関心のもちかたとは違っている。彼の眼中にあったのは一人の大人としての人間存在ではなかった。ヘルバルトは問う。「人間は何であるのか、いかにして人間は人間にまでなったのか、またいかにして人間はそれ以上になることができるのか」⁴¹⁾。彼の視野の中には、変化していく人間が把握されている。従って彼にとって理論は、人間の変化の可能性を保証しうるものでなければならなかった。ここからヘルバルトのカント・フィヒテ批判が生まれ、また彼の体系が構築される。これは本来的に教育するという事態の本質にかかわる問題意識である。人間が人間になるということ、人間のあり方が変わっていくということ、これを理論的に保証しようとすることは、とりもなおさず教育学の基礎理論を構築しようとするのである。

実際、ヘルバルトが哲学や心理学の著作に先立つ形で教育学の著作を出版したのは、彼の問題意識がそもそも教育学的であったからだと考えられる。ヘルバルトにとって教育学は、カントの教育学の講義とは異なり、サイド・ワークではなかった。ヘルバルトは、『教育の目的から演繹された一般教育学』に対するヤッハマンの批評に対して、自分の教

育学と哲学とは一つの道を歩んでいる、と弁明している。「当時かなり長かったそして私にとっては喜びであった教育の営みが終ろうとしていた。私は諸成果を書き留めておこうと思ったし、皆に知らせようと思った。それはしかし困難なことだった。というのも（私の教育に関する諸成果は）私の哲学的な確信と最も緊密に結びついていることだったし、また私の学問的な研究と軌を一にしていたからだ。その研究の道は、公に流布して認められていた教えることについての考え方とははるかに遠く隔たっていたし、日に日に遠離っていった。私の教育学は、私の形而上学と実践哲学との観点がなければ、無である。しかしこれらの学は当時なお口づてに話してあったにすぎなかった。どうすればよかったと言うのか………」⁴²⁾

人間が変わっていく、という視点からすれば、フィヒテの先験的自由による実践性の保証も、新たな宿命論であった。フィヒテが、宿命論か自由論か、と論じたと同様の対立項をヘルバルトにも読みとることができる。彼は、宿命論並びに先験的自由論を批判する。このヘルバルトの立場を陶冶可能性論の立場と呼ぶことができる。宿命論を否定し、自由を尊重する点ではフィヒテと軌を一にするが、フィヒテの論は陶冶可能性を保証しうる論ではなかった。ヘルバルトはフィヒテを批判する。「自我が自己に対して非一我を指定することは暴力によって生み出された、またまさに全く暴力によって固執し続けている観念論の誤謬である。一あたかも事物が根源的に自我の否定にくっついているものであるかのように。このやり方では決して汝 (Du) も彼 (Er) も生じないだろう。一自己の人格以外には他の人格性は認められない（のだから）。むしろ内的に知覚されたものは、可能などころでは外的なものに移しかえ (übertragen) られる。それ故、自我と共に同時に我々 (Wir) が形成される。これは観念論が忘れてしまった、否、観念論者がその夢から醒めたくないと思ったとき忘れねばならなかったことである」⁴³⁾。フィヒテが端的に定立された自我と定立する自我との絶対的同一性について語るとき、彼は論理的な誤謬を犯しているものであり、これを真だと主張することは暴力だ、とヘルバルトは言う。「観念論の守護神である自我性 (Ichheit) はそれ自体、定立による存在の、かつ存在による定立の終りなき循環によって、絶対的行為である」⁴⁴⁾ この観念論の自己完結性を「思考するものと思われたものとの一致である自我」に止めず、更に「行為するものとの行為されるものとの一致の概念へと移行するとき」⁴⁵⁾ フィヒテは容易に見てとれる誤謬を犯している。このような形で展開される自我論は、人間の行為を扱う自由論の次元と必然的に結びつくはずはないのである。ここに観念論の傲慢がある。人間の現実的な行為の場面において、非我は自我の否定にくっついているものではない。そこには他者の人格が存する。フィヒテのやり方によっては、汝の人格を認めることはできないだろう。一ヘルバルトのこの論点は単にフィヒテ批判に止まるのではない。彼は、教育についての学問の成立をかけてこの批判を度々展開する。長くなるがヘルバルトの批判を引用する。

「(フィヒテの) 体系は二つの絶対的自我が相互に影響を及ぼしあうことを許容していない。では誰が絶対的であるべきなのか。生徒がか。そうなると教師が閉め出される。教師がか。これが……まず第一に残っている。では教師は、生徒を理性的存在として育てあげる間に、同じ生徒に産出的直観をも身につけさせるのであろうか。産出的直観の産出によって、就中彼、教師についての像も、それと共に教師の活動全体の諸像も生じるのか。しかも(生徒は) 教師 (Er — 絶対的自我としての) 自身が⁴⁶⁾生き生きとしておりかつ

能動的であるのと全くもって同一の感覚界を見出すのか。二つの（各々に）根源的に産出された世界の間の予定調和は、どこに根拠づけられているのか。……—ここ教育学においては、哲学者は自分で措定した理性的存在者が先験的地点そのものに立入ることができるように措定されているのか、またはできないように措定されているのかを明らかにしなければならない。というのも理性的存在がこの地点にまで高められるのをみることが、教育の目的でなければならないはずであるから。さもないと教育は、ありふれた活動として、現実の深みの中を這い回っていなければならない。更に哲学者は誰かが一方では純粋な理論の地点に、他方では純粋な道徳性の地点に到達するための諸条件について明確にしなければならない。ここで哲学者がまたも自由という言葉をもって答えるならば、もはや教育は失なわれる。今専ら注意すべきことは、哲学者がその自由をあらゆる種類の必要な条件にもはや結びつけ（て考え）ることをせず、実際には、絶対的能力が全く絶対的に生じてくるであろう、ということに甘んじているということである」⁴⁶⁾。

「……フィヒテの倫理法則を子どもに対して用いることはできない。というのも子どもは服従すべきであり、かつ学ぶべきであるからだ。……しかしフィヒテの倫理法則は『知性の必然的な思考に、つまり子どもは自分の自由を自立性の概念によって直ちに例外なしに規定すべきだ』というところにある。……フィヒテの倫理論の全体は、非我の全体に対する、つまり世界に対する自我の営みに基づいている。—これだけのことではない。フィヒテの観念論によれば、教師にとって生徒は、かつ生徒にとって教師は単なる現象だということになるだろう、（また）あらゆる教育自体が単なる現象—決して本当の因果性ではない—だろう、（更に）一般に時代を超えた先験的自由が少しも時代の改善をもたらさない、ということが、十分に知られている」⁴⁷⁾。

こうしたヘルバルト批判と、＜自我—表象—（実在する）他者＞の図式を併せて考えると、ヘルバルトが素朴な実在論に立っているような気分になる。感覚知覚の背後に物自体を想定し、他者の表象の背後に他者の実在を素朴に想定しているかのようである。しかし、ここに素朴な実在論が登場したのだと見るべきではないだろう。ヘルバルトの批判は、存在の確実性を確保することによって、感覚知覚（あるいは表象）をいたずらに浮遊させまいとする点に主眼があった。ヘルバルトにおいて、感覚知覚（表象）が常に実在を伴っていると主張されているわけではない。感覚知覚は、純化する、という思考の批判によって身分が改められねばならない。ただ、教育するという行為において、人格と人格とのぶつかり合いの中で何らかの変化が生じるとき、それは、自我の自己完結的な自己展開によっては生じ得ない、他者の人格が実在として理論的に保証されていなければならない、という視点からの批判なのである。

フィヒテの自我の実践性を批判しながらなお、自分の実践哲学について次のように語るとき、ヘルバルトは、カント、フィヒテ流の自我論を継いでいた。「実践哲学の全体は、人間が自分の意志を見えるということ、並びに意志をいかに見、判断するのかに基づいている。しかして判断の後で改めて意志を方向転換させる。そしてそれから実際におこなわれた方向転換が十分か否かについて自ら証言する」⁴⁸⁾。

VII. 陶冶可能性論の視点

これまでの論述により、ヘルバルトが自己の問題意識とフィヒテ批判の中から、陶冶可能性論と呼べる視点を確立してきた、と言える。陶冶可能性 (Bildsamkeit) との語をケーニヒスベルク大学に赴く (1809年) までのヘルバルトが使っているわけではない。つまり、彼の思想の形成期に、直接この語によって自己の立場を規定しているのではない。この語は後の『教育学講義綱要』(1835年)で、教育学の基礎概念として冒頭の命題に用いられている。しかし、この考え方自体は既に『教育の主要任務としての世界の美的呈示について』(1804年)においてははっきりと表明されている。この論文自体が、「教育は可能でなければならない」との命題を出発点として構成されている。そこでは、この命題は「公準 (Postulat)」だと述べられる。このことは、人間が人間にまでなるということを明らかにしようとの問題意識を、教育学の構想においては、教育するという事態が理論的に保証されてはじめて教育学は展開される、と変形した上で、先の命題を大前提に据えることによって教育学を展開することを意味する。従って、教育学の構想の段階から、そればかりでなくヘルバルトの思想全体の形成段階から、陶冶可能性論の視点が確保されていたと言える。

この視点は、人間の変化の可能性が理論的にいかにして保証されるのか、にその眼目を有する。それはつまり、教育するという事態を理論的に保証することであった。教育実践の蓄積ばかりではなく、この視点の成立をまって始めて、教育学の学問理論の本格的検討がおこなわれ得るのである。ヘルバルトにあっては、この視点は更に、次のことを含意していた。

- i) この視点は、主に『全知識学の基礎』の著者としてのフィヒテを継承し、批判していくところから、自我論の系譜において展開された。
- ii) この自我論は、人間の自由に基づく主体としての実践的行為を確保することを含む。
- iii) その場合でも、他者の人格を自我と共に認め得るという仕方、で、理論的に展開されなければならない、と考えられた。

註

- 1) Nicolin, F., Pädagogik als Wissenschaft, 1969, Einleitung, IX
- 2) Niethammer, F. J., Vorbericht über Zweck und Einrichtung dieses Journals, in Philosophisches Journal einer Gesellschaft Deutscher Gelehrten (以下, Philosophisches Journal と略記), Erstes Heft, Erster Band
- 3) Hrsg. v. F. J. Niethammer, Philosophisches Journal, Ersten Bandes zweites Heft, 1795, S. 178
- 4) Menze, C., Die Wissenschaft von der Erziehung in Deutschland, S. 14–16, in Problemgeschichte der neuen Pädagogik, 1976
- 5) Nicolin, F., op. cit., Einleitung
- 6) Hrsg. v. F. J. Niethammer u. J. G. Fichte, op. cit, 8. Bd. 1. Heft, 1798, S. 47–85. この号は奇しくも、フィヒテが大学を辞職するはめになった『神の世界支配に対するわれわれの神仰の根拠について (Über den Grund unseres Glaubens an eine göttliche Welt-

regierung)』及びフェールベルクの『宗教の概念の発展 (Entwicklung des Begriffs der Religion)』との三本の論文から成っている。この二つの論文のため、この雑誌はライプツヒ、ヴィッテンベルクでは没収の憂き目をみた。

- 7) 「全知識学の基礎」に関する講義以外にも1794年に公開講義をおこない、同年中に次のタイトルで出版した。“Einige Vorlesungen über die Bestimmung des Gelehrten”
cf. J. G. Fichte-Gesamtausgabe, Der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, hrsg. v. R. Lauth & H. Jacob, 1966, Bd. 3, 編者による Vorwort. また、フィヒテ・シェリング、世界の名著 続9, 岩崎武雄他, のフィヒテに関する年譜, 632頁。
- 8) この講義は1795年に次の標題のもとに印刷された。“Grundriß des Eigenthümlichen der Wissenschaftslehre in Rücksicht auf das theoretische Vermögen, als Handschrift für seine Zuhörer” これはまた1802年に次のタイトルで Neue unveränderte Auflage として、出版された。“Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre und Grundriß des Eigenthümlichen der Wissenschaftslehre in Rücksicht auf das theoretische Vermögen”
また同じ1802年に Zweite verbesserte Ausgabe として次のタイトルで出された。“Grundriß des Eigenthümlichen der Wissenschaftslehre in Rücksicht auf das theoretische Vermögen, als Handschrift für seine Zuhörer”
cf. J. G. Fichte-Gesamtausgabe, op. cit., 特に S. 136-138. これらの版の違いは小さな語句の異動に止まる。それ故この論文においては『聴講者に対する草稿としての全知識学の基礎』として扱い、特に版の相異に留意しない。
- 9) Johann Friedrich Herbart Sämtliche Werke, hrsg. v. K. Kehrbach u. Otto Flügel (以下 K. と略記), 1964, Bd. 1, XXXIX, 及び S. 3, 4
- 10) cf. W. Asmus, Johann Friedrich Herbart, Eine Pädagogische Biographie, Bd. 1, 1968, S. 72-107
- 11) cf. K. 16Bd., S. 28, 友人シュミット宛の1796年6月1日付の手紙
- 12) 『全知識学の基礎』については当初バイエルン・アカデミー版の全集と木村素衛訳の文庫本とを併用していたが、原稿執筆の段階で前者を使うことができなかったのも、後者による頁数を掲げることにした。訳文は、必ずしも木村訳通りではない。またこの訳を採る場合でも旧漢字は当用漢字に改めた。
- 13) Fichte, J. G., Versuch einer neuen Darstellung der Wissenschaftslehre, in Philosophisches Journal, hrsg. v. J. G. Fichte u. F. I. Niethammer, 5. Bd. 1. Heft, 1797, S. 3.
- 14) この論文は、ドイツ語で記した標題によって、註の13) で示した様に印刷された。しかし、メディクス版の全集、木村素衛訳及び岩崎武雄訳では、日本語で記した如くに改められ、この題名によって知られている。私が手にしているのは、Chr. E. Gabler によって出版された “Philosophisches Journal” に発表されたもので、この雑誌の第二刷目にあたる。引用はこれによるが、日本語の標題は慣用に従って『知識学への第一序論』と記す。
- 15) Fichte, op. cit., S. 2
- 16) cf. ibid. S. 9
- 17) 木村素衛訳, 『全知識学の基礎・上巻』, 昭和24年, 101頁
- 18) ibid. 107頁
- 19) ebenda
- 20) ibid. 110頁
- 21) 木村素衛, 『フィヒテ』, 昭和21年, 序, 1頁。旧漢字は当用漢字に改めた。
- 22) ibid. 67-68頁

- 23) ibid. 68頁
- 24) ibid. 155頁
- 25) ebenda
- 26) ibid. 156頁
- 27) ebenda
- 28) 拙稿, ヘルベルトの『美的表現』におけるリアリスティックな観点について, 九州教育学会研究紀要第3巻, 1975, 2頁, 及び註12)を参照。
- 29) ヘルベルトにおいて, 美的判断の必然性に従うことは, 言葉の最も高貴なる意味において自由になることであった。cf. Herbart, Über die ästhetische Darstellung der Welt als das Hauptgeschäft der Erziehung, in Johann Friedrich Herbart Pädagogische Schriften, hrsg. v. Walter Asmus, 1. Bd., S. 114
- 30) 木村素衛訳, 『全知識学の基礎』, 117-118頁
- 31) cf. K. 1. Bd., S. 96, 103., K. 2. Bd., S. 206, 等。
- 32) 批判的観念論の用語は, フィヒテ自身も使っている。そこでは「観念論が, 知性の必然的な諸法則についての, 唯一合理的に規定されかつ実際に説明する前提, となる限りで, その観念論は批判的もしくは先験的と呼ばれる」と述べられている。(cf. Versuch einer neuen Darstellung der Wissenschaftslehre, in Philosophisches Journal, 5. Bd. 1. Heft, 1797, S. 35-36)
- しかし, 私がここで使うのは, この意味に於てではない。むしろ「批判のジレンマを尊重する立場」(田原八郎, 『批判的自我論の系譜』, 1977, 153頁)の意味においてである。この語は, 田原八郎に負うところが大きい。
- 33) 木村素衛訳, op. cit., 118頁
- 34) ebenda
- 35) cf. Versuch einer neuen Darstellung der Wissenschaftslehre, in op. cit., S. 17-26
- 36) 木村素衛訳, op. cit., 34頁
- 37) J. F. Herbart, Allgemeine Praktische Philosophie, in K. 2. Bd., S. 385. その単純で根源的な意志の関係とは次の五つである。＜自我-表象された自我＞, ＜自我-（意志をもち）実際に行為している私＞, ＜自我-表象された他者＞, ＜自我-（意志をもち）実際に行為している他者＞, ＜自我-（自我の働きかけを受ける）受動的な他者＞
- 38) Martin, G., Die deutsche ontologische Kantinterpretation, Kant-Studien Ergänzungsheft, Bd. 81
- 39) K., 4. Bd., S. 402
- 40) Asmus, W., op. cit. S. 106
- 41) K., 16. Bd., S. 28
- 42) K., 2. Bd., S. 163. 1814年, ヤッハマンの批評に対する返答
- 43) K., 4. Bd., S. 402. 1816年『心理学教科書』
- 44) K., 3. Bd., S. 240
- 45) ebenda
- 46) K., 1. Bd., S. 255の注. 1804年『直観のABCについてのベスタロッツの理念』第二版への後記。
- 47) K., 18. Bd. S. 141. 1835年グリーベンカール宛の手紙
- 48) K., 2. Bd. S. 479. 一般実践哲学に対するヘルベルトの手がきの諸注意

(昭和57年10月31日受理)